KYOTO KEIKAN FORUM 2014 SYMPOSIUM

NPO法人京都景観フォーラム/シンポジウム

景観でつながる まちづくり

2014.3.1sat

会場/ひと・まち交流館京都 3階 第5会議室

各地域で行っているNPOの活動報告と、
街道・橋・運河などのかつて築かれた都市基盤を
現代の景観まちづくりの視点に
どう活かすかを考えます。

主催：NPO法人京都景観フォーラム　後援：京都市、公益財団法人京都市景観・まちづくりセンター

特定非営利法人
京都景観フォーラムについて

歴史都市「京都」

1200年の歴史をもつ京都では、常に文化の中心として、暮らしや営みのなかで、都市としての基盤を築き、味わい深い生活文化を育んできました。京都市民は、その懐の深さを大事にしながら、知恵を結集して生き生きとしたまちを継承してきました。

反省から転換

ところが、日本が世界のトップを目指して高度経済成長を遂げるなかで、どこの都市も同じ様相となり、地域特有の文化を失ってきました。京都においても例外ではなく、このままでは日本文化を失ってしまうという危機感から、京都市は大きな決断を下し、景観に関する規制政策を制定しました。

活動の始まり

その直後の市民の戸惑いのなかから、「景観とは規制されて形成されていくものではなく、市民が自ら作っていくものである」という市民側からの視点において、私たちの活動が始まりました。

景観とは単体で作られるのではなく、特性をもったエリア(地域)の中でいくつも物事が絡まり合って形成していくものです。美しいまち、美しい景観は、私たちが住む地域に愛着と誇りをもって暮らしていく過程で現れてくるもので、それには、地域の特性や資源を再認識し、未来に向かって地域の将来像を共有することが大切です。

私たちは、そのきっかけ作りや、プロセスを一緒にお手伝いしたいと、手探りで活動を続けています。

6年目を迎える「景観まちづくり」

私たちが活動を始めて6年目を迎えることになりました。この間に、景観を専門的に勉強して景観まちづくりに取り組もうという仲間も増えました。

市民も自分たちの地域に目を向け、暮らしやすい環境、美しいまちを、自分たちの思いを共有して作っていこうという機運も少しずつ現れてきました。

私たちから地域へ働きかけたり、地域から私たちにお声掛けがあったり、いろんなところで地域の「景観まちづくり」の芽が出てきたように感じます。これらの芽が豊かな樹木に育ちますように、私たちはとても楽しみにしています。

理事長 / 内藤 郁子

シンポジウムの趣旨

景観でつながるまちづくり

景観とはすぐに目に見えて変わるものではなく、さまざまな人の関わりや営みによって、じわりじわりと形づくられてくるものです。

地域に暮らす人だけでなく、街道でつながる、橋でつながる、運河でつながる…これからの景観まちづくりのきっかけは空気のように存在している地域の景観資源を通して「つながる」ことなのかもしれません。

私たちは、鴨川や高瀬川、鴨川運河などの河川や、七条通り、本町通りなどのまちあるき（フィールドワーク）を重ねて実施してきました。そこで、地域を愛するたくさんの方々、また、地域にずっと長く存在する魅力的な橋や建物に出会いました。

シンポジウムの前半は、それらの地域で行っているNPOの活動報告と、街道、橋、運河などのかつて築かれた都市基盤を現代の景観まちづくりの視点にどう活かすかを考えるパネルディスカッションを行います。

後半の交流会では、これまでNPOの活動に参加してくださった方や支援して下さった方々と、テーブルを囲んだ交流会を行います。

京都の景観に関する素朴な疑問や地域で抱える課題から熱い提案まで、話をすることでつながり、ネットワークが広がっていくことを願っています。

内藤 郁子

NPO法人京都景観フォーラム
理事長 / 内藤 郁子

目 次 / CONTENTS

04 鴨川景観プロジェクト
～七条大橋竣工百周年を契機として～

06 七条大橋がむすぶ
七条通界わいプロジェクト

10 疏水でつながる人とまち
～「鴨川運河会議」プロジェクト～

12 柊野プロジェクト
～柊野学区まちづくりビジョンの
策定から、その推進へ～

13 公共サインプロジェクト
～放置自転車撤去警告看板の提案～

14 京都景観エリアマネジメント講座

15 キーワード集プロジェクト

15 屋外広告研究プロジェクト

執筆者紹介（五十音順）
小林明音 p.4-5
篁正康 p.11,12
辻野隆雄 p.15
富家大器 p.13,15
内藤郁子 p.14
中村伸之 p.6-9,13,15
西脇秀一郎 p.10-11
松本よし子（有限会社エイブル）　編集デザイン

本プロジェクトは、京都市未来まちづくり 100 人委員会の活動支援事業の助成を受けて実施しています。関係者各位にお礼申し上げます。

NPO 法人京都景観フォーラム / シンポジウム
景観でつながるまちづくり

発行 / 2014 年 3 月 1 日
NPO 法人 京都景観フォーラム
FAX: 075-491-9663
メール：kyotokeikanforum@yahoo.co.jp

鴨川景観プロジェクト

～七条大橋竣工百周年を契機として～

事業概要……2013 年に竣工 100 周年を迎えた七条大橋。調査資料によれば、市電を通すために強固に作られたコンクリートアーチ橋で、竣工当時は繊細な意匠の欄干や照明柱を備えていたという。私たちは、土木遺産、都市遺産として景観的価値のある七条大橋を後世に伝えていくため、2012 年からこのプロジェクトを進めている。ここでは、これまでの活動内容をまとめるとともに、七条界隈プロジェクトにつながる経緯を紹介する。

きっかけ

「2013 年に七条大橋が 100 歳になる」……そう伺ったのは 2012 年の春、七条大橋東詰で酒屋を営んでおられる酒谷義郎さんからだった。幼いころ鴨川に架かる橋や鴨川で遊び、洪水や河川改修、鴨川運河と京阪の地下化などの歴史を間近でご覧になりながら、竣工当時と様相を変えた七条大橋を何とかきれいにしてあげられないか、と思い続けてこられた。

私たちは、鴨川と橋の景観の変遷に興味を持ち、さらに、竣工 100 周年という区切りにできるだけ多くの方に七条大橋の価値を知って頂くための取組を行うこととなった。

七条大橋

七条大橋について

七条大橋は、鴨川に架かる橋の中で唯一明治期の意匠をそのまま残し、竣工当時新技術として採用され始めていた鉄筋コンクリートアーチ橋として群を抜いて巨大である。設計を手掛けたのは鉄筋コンクリート構造の第一人者である柴田畦作、意匠には台湾で数多くの近代建築を残す森山松之助の名が残る。

こういった資産的価値の高い橋が竣工された背景には、明治維新以降に京都が経験した近代化、西洋化の中における都市基盤の整備と強化の背景があった。1908（明治 41）年に起工式が行われた京都市三大事業は、現代の京都の都市基盤の元になる道路改築・電鉄敷設、上水道建設、第二疏水建設の３つを指す。七条通はこのときに電鉄建設路線として拡幅され、1913（大正 2）年、電鉄軌道に耐えられる強固な構造の七条大橋の竣工に至ったのである。七条通沿道には京都国立博物館など、今もなお明治期に建設された近代建築が立ち並ぶ。

その後、1935（昭和 10）年、鴨川で未曽有の大水害が起こる。鴨川に架かる多くの橋は流出、もしくは甚大な被害を受けて解体されるなどし、新しく架け替えられていく中、七条大橋はその強固な構造から洪水にも耐え、現在にいたる。残念ながら、当時の高欄や照明柱は、戦時中の金属供出で失われてしまったが、鉄筋コンクリートアーチ橋の堂々たる姿や、親柱などの意匠は現在に残されている。

七条大橋西側の親柱

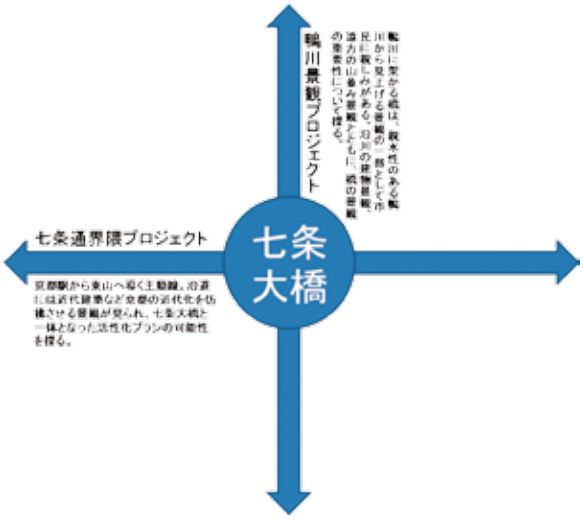
七条大橋竣工当時の高欄や照明柱を再現

これまでの取組

私たちの取組の柱は、七条大橋の近代化遺産としての認識を高めることと、橋をきっかけに鴨川景観のあり方について考えることである。さらに、この取り組みを通して、成熟した都市基盤をどのように地域資源として活かしていくかの実践ができれば、と考えている。昨年度は、鴨川に架かる橋の景観の重要性をつかむため、南

北軸としての鴨川景観に着目したプロジェクトを実施した。今年度は、七条通を近代化遺産として総合的に捉えるため、東西軸に着目した七条通界隈プロジェクトを実施した。

図２　七条大橋を契機としたプロジェクトの関連性



これまでの取組

2012 年度は、七条大橋の景観的価値をより多くの市民の方にお伝えしようと、まずは文献調査やヒアリングなどを行った。2012 年 8 月には、七条大橋近辺にお住まいの方などに、橋や鴨川にまつわる記憶、写真などについてヒアリングを行った。七条大橋は、鴨川を挟んで右岸側が下京区、左岸側が東山区だが、両岸の地域の方から昔の話をお聞きすることができた。また、七条から三条までの鴨川に架かる橋を巡るフィールドワークを行い、各々の区間における沿川景観の景観特性が違うことや、各橋の特徴や新たな発見をすることができた。これらの調査やフィールドワークをもとに、2012 年 9 月、七条大橋の景観的価値を広めつつ、鴨川景観に関する市民の意識調査を行うため、「鴨川橋めぐりツアー」を実施した、総勢 85 名で鴨川を歩いた。両岸の地域にお住まいの方、一般市民の方はもちろん、専門家、研究者、地元関係者の方々と知り合えるきっかけにもなり、さらに、四条大橋の高欄をデザインされた（生前の）故田村浩氏にもお会いすることができた。

2013 年 2 月に開催したシンポジウムでは、鴨川と橋の変遷に関する調査報告をさせていただくとともに、鴨川とともに文化を育んだ京都の未来についてさまざまな角度から提案を行った。

（左上）　地元の方のヒアリング（平成 25 年 8 月）
（右上）　フィールドワーク（平成 25 年 8 月）
（左下）　鴨川橋めぐりツアー（平成 25 年 9 月）
（右下）　シンポジウム「鴨川・まちと川のあゆみ」（平成 26 年 2 月）

こういった取組の集大成として、2013 年 4 月 14 日、100 年前の同じ日に開通式が行われた七条大橋で、「100 年目の橋渡り」を開催した。当時井上市長を先頭に行われた開通式を、現門川市長を先頭に再現し、100 年間鴨川を見守り続けた七条大橋の功績を労った。

百年目の橋渡り（平成 26 年 4 月）

今後に向けて

私たちは、七条大橋が極力往時の姿に近い形で復元されて、美しく手入れされること、登録有形文化財として認定され、国民の貴重な財産であることが認知されることを願い続ける。さらに、七条大橋を近代化都市資産として見直し、適切に保全し活用することで、七条大橋界隈の地域社会の発展に結び付けたいと考える。そのため、地元の方々と共に「鴨川を百年見つめる七条大橋とあゆむ会（仮）」準備会を設立し、活動を進めている。また、今年度は、七条通全体が近代化遺産を地域資源とした総合的な活性化を目指せないかと、七条通界隈活性化プロジェクトにも取りかかっている。このような多面的な活動が、これまで京都の近代化に貢献してきた様々な社会基盤が地域に肯定的に受け入れられるきっかけとなり、活性化の一助となることを期待したい。　（小林明音）

七条大橋がむすぶ七条通界わいプロジェクト

事業概要……昨年度は、地域の皆さんと共に七条大橋の価値と保全活用について考えた。今年度は「七条大橋が地域をむすぶ」というコンセプトで、東山区と下京区の「七条通界わい」が連携し、京都を代表する“歩いて楽しい”文化観光エリアを形成するビジョンを探った。4つのマップで地域を紹介する「七条通界わい発見ブック～まちがつながる、夢がひろがる」と昨年からの七条大橋研究をまとめた「京都・鴨川／七条大橋物語」を発行し、地域の皆さんに配布した。七条通界わいの歴史文化や地域景観の発見はまだまだ不十分で、来年度以降も継続したいと考えている。

七条界わいは歴史文化資源の宝庫

京都市三大事業（1908-1912）で京都は近代都市に生まれ変わった。七条通（拡築）や七条大橋もこの事業で整備された都市インフラであるが、都市景観の成熟、文化創造のための環境整備が今後の課題である。ここでは東山通からJR山陰線までの区間を「七条通界わい」と呼び（下図）、界わいをつなぐ七条大橋の価値を考える。

七条通界わいは、京都駅直近の3キロ弱の区間であるが、世界遺産・西本願寺、三十三間堂、豊国神社、京都国立博物館、京都水族館など多くの歴史資産、学術文化施設が集積し、京都国立博物館新館や京都鉄道博物館の開館、京都市立芸術大学の移転などのプロジェクトが進行中である。

それらをつなぐのが七条通であり、七条通と鴨川が出会い東山の景観を大きく感じることができるのが七条大橋である。七条通界わいでは、七条大橋を保全復元するなど、京都の顔としてのブランドづくりが求められる。

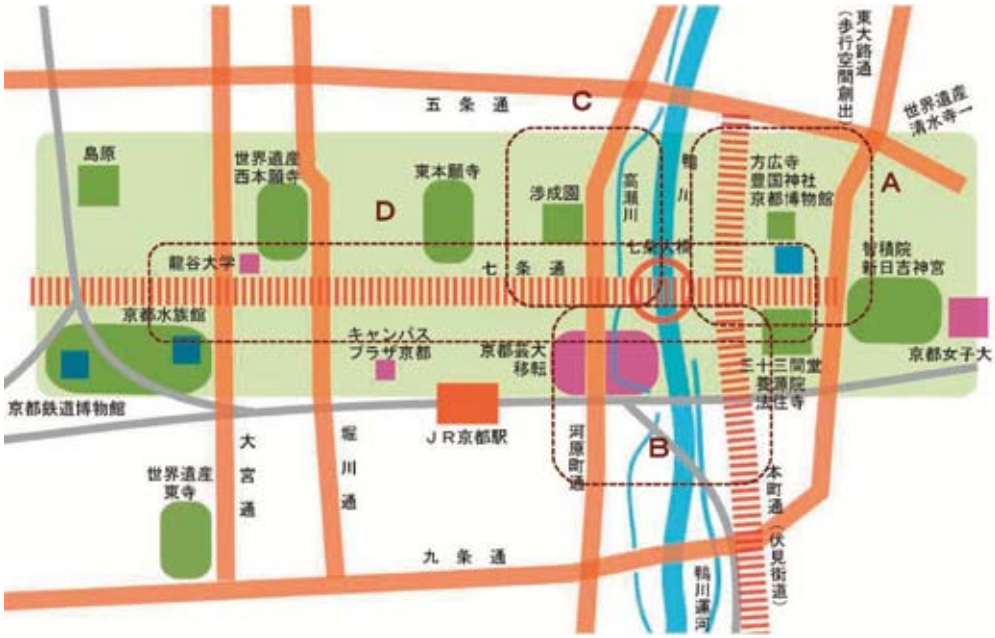
七条通界わいのブランド（＝アイデンティティ）の源泉を探るため、仮説的に4つのテーマゾーンを設定し、「七条界わい発見ブック」を作成した。

A．東山七条エリア：桃山文化の残影が色濃く残るエリアである。ここを舞台とした豊臣秀吉七回忌の盛大な臨時祭礼を描いた「豊国祭礼図屏風」（豊国神社蔵）に往時の景観や風俗が詳しく描かれている。

B．旧・大仏柳原庄エリア：戦国時代、鴨川の東西が一つの村として成立した。東は伏見街道の往来で栄え、西は差別を受けながらも地域を発展させてゆく。

C．高瀬川・稚松エリア：東山の張出しを受けて鴨川がわずかに西に曲がることで、条里制の町割りに微妙な“ひずみ”が生まれる。高瀬川や寺町や路地のあるエリア。

D．近代建築エリア：明治以降のさまざまな様式の近代建築がよく保存されているのが七条通界わいの特色で、京都が近代を取り込んだ過程を体験できる。



七条界わい・歴史文化資源の高度集積地

豊国祭礼図屏風に描かれた“タケノコ男”
豊国神社宝物館で探してください

七条通界わいの景観特性

七条通は阿弥陀ヶ峰に突き当たり、その山頂には秀吉の墓・豊国廟がある。手前は鴨川と七条大橋（Google Earth）

七条界わい・歴史文化資源の高度集積地豊国神社唐門（国宝）は桃山城の遺構と伝えられる

一般道のコンクリートアーチ橋では日本最古の七条大橋

サクラやコブシの花咲く高瀬川

七条界わい・歴史文化資源の高度集積地インドやサラセンの意匠を取入れた西本願寺伝道院

（七条通の課題）世界遺産の寺院の大屋根と白いビル

（七条通の課題）百年前の道路拡築の段差が今も残る

崇仁地区の景観まちづくり

景観は地域の「本質」を感性に伝える。平安京の東南に当たる当地区では、人工的な条里制街区が鴨川の流れという自然に浸食される。それに合せるように高瀬川の流れも「自由な」曲線を描き、独特の町割りと景観を生む。

京都市立芸術大学が移転する崇仁地区では、将来、大きな景観の変化があると予想される。区画整理事業によって、画一的な空間構造に矯正され、景観的な地域個性を失うのである。差別と闘ったまちづくりの歴史を後世に伝えるためにも、景観資源を把握し、守り活かすガイドラインを策定する必要がある。

以下は、当地区の研究会で行った発表の概要である。

崇仁地区の景観資源

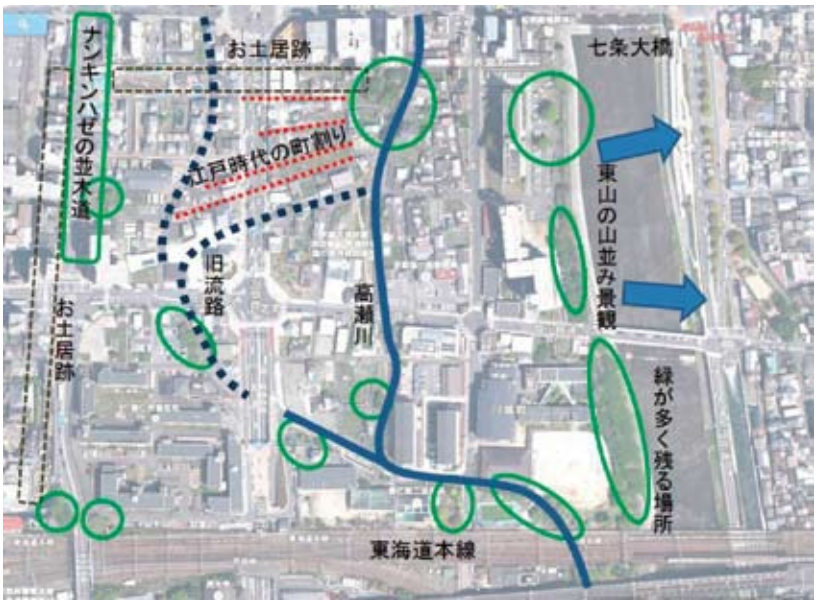
鴨川の地勢から生じる空間の「ひずみ」
蛇行する高瀬川の流路、水辺の樹木、神木や祠
鴨川・東山への眺望
江戸時代の町割りや柳原銀行など歴史を語る風景
七条大橋など京都の発展を支えた近代化遺産

景観資源を守り活かすガイドライン(案)

鴨川の景観を活かし活かされる(見る見られる)
町割りの「ひずみ」「自然な線形」「路地」を活かす
七条大橋、高瀬川(旧流路)・樹木・祠の保全活用
部落解放のまちづくり史を語る空間を保全する
人権まちづくりのコンセプトを景観づくりに活かす
「人の世に熱あれ、人間に光あれ」

1989 年の地形図とお土居（茶色の線）

景観資源をプロット（お土居跡、高瀬川、緑、町割り、東山の眺め）



ナンキンハゼの並木

高瀬川旧路の正面に柳原銀行が見える

鴨川から 20m のエリアは岸辺型美観地区で建物の高さは 15m 以下、鴨川から 20m 以遠は旧市街地美観地区で高さ 20m 以下に規制されている。写真下左は上流から七条大橋を見た現況写真。写真下右は建物の高さを、現在の基準に合わせたシミュレーション。

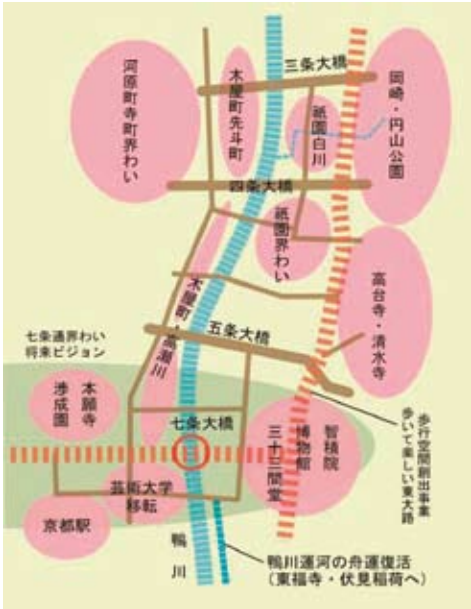
つながるまちづくりへ

京都駅に接し、歴史文化資源が高度に集積した七条通界わいが、東山や伏見の文化観光エリアとつながることで、京都市南部の歴史回廊が形成される。

京都駅から芸術大学（移転予定）に立ち寄り、七条大橋を渡り、三十三間堂・博物館・豊国神社などを経て、東山の名勝旧跡を訪れるという贅沢な散策コースとなることだろう。（京都駅から東山三条まで約 4.2 キロ）

また、プロジェクトを進めるうちに、この地域と伏見の歴史的なつながりに気づいた。本町通はかつては伏見街道として伏見港と洛中をつなぐ重要な動線であった。

京都駅・七条界わいと東山をつなぐ



京都駅を起点とした京都市南部の歴史回廊

並行する鴨川運河は、舟運のために建造されたが（1894 年完成）、今は使われていない。これらは可能性を秘めた動線である。

鴨川運河の舟運を復活し、本町通とつなぐ回遊空間を形成すれば、京都駅・七条界わいから東福寺・伏見稲荷・藤森神社・伏見を巡る魅力的な京都市南部の歴史回廊となる。（京阪七条駅－伏見桃山駅間の直線距離 6.3 キロ）

七条通・七条大橋や鴨川運河は、都市の近代化を目的に建造された百年前のインフラである。周辺の歴史文化資源を活かしきれていない都市インフラや当初の目的を終えた都市インフラをつなぎ、歩いて暮らせるヒューマンスケールの文化創造・観光交流の街に再生したい。新たな開発を抑えて、仏（インフラ）に魂（文化）を入れるようなまちづくりが、歴史都市・京都にふさわしいであろう。

行政区を超えて、地域の人々と行政と NPO が、七条通界わい、ひいては京都市南部の文化復興の将来ビジョンを語り合う場が求められる。　（中村伸之）

鴨川運河の修景シミュレーション

疏水でつながる人とまち

～「鴨川運河会議」プロジェクト～

事業概要……本プロジェクトは、京都市伏見区の深草地域周辺に存在する疏水「鴨川運河」を基点とした景観まちづくりの試みをなすものである。今年度から「鴨川運河会議」を設置して、行政（深草支所）・専門家・学生による鴨川運河の持つ魅力・価値の掘り起こしをフィールドワークやワークショップを通して行っている。この取り組みをもとに、鴨川運河の魅力をまとめた冊子である「鴨川運河 100 の視点」を作成し、地域住民を巻き込んだ景観まちづくりの取り組みへの展開を目指している。

1．深草地域と鴨川運河プロジェクト

歴史都市・京都の近代化の象徴の一つとして知られている琵琶湖疏水は、滋賀県の琵琶湖から山科を通り、蹴上にぬける。この琵琶湖疏水は、京都の中心部に流れ（鴨東運河）、夷川発電所の先で鴨川左岸沿いに南下し、三条、四条、五条、そして七条を通り、豊臣秀吉の旧伏見城の外堀であった濠川につながる。この鴨東運河の先、約 9km に渡る疏水の区間を「鴨川運河」と呼ぶ。この鴨川運河は、初代京都府知事の北垣国道が「運輸の便をはかる所存」と述べたように、物資輸送の航路として用いられるだけでなく、明治から昭和にかけては炊事洗濯の場として用いられるなど地域住民の日常的な空間として親しまれてきた。

このような歴史を有する鴨川運河を深草地域のこれからのまちづくりにおける重要な“地域資源”と位置づけ、その魅力を再度掘り起こすことで、今後の深草地域のまちづくりの基点とするのが鴨川運河プロジェクトである。

今年度は深草地域において、行政・専門家・学生からなる「鴨川運河会議」を始動させ、鴨川運河の魅力を多様な視点から整理することで、これからの深草地域における魅力的なまちづくりへとつながる試みを行ってきた。

春の鴨川運河

2．「鴨川運河会議」～“鴨川運河 100 の視点”～

「鴨川運河会議」の経過

- 2013 年 10 月 11 日　第 1 回鴨川運河会議
  －参加者の自己紹介と会議の方向性の検討－
- 2013 年 11 月 13 日　第 2 回鴨川運河会議
  －鴨川運河の魅力発見のためのワークショップ－
- 2014 年 1 月 6 日　疏水にかかる橋の調査
  －老朽化のため解体される高松橋の調査－
- 2014 年 1 月 24 日　疏水フィールドワーク
  －「鴨川運河 100 の視点」冊子作成のための資料集め－
- 2014 年 1 月 29 日　第 3 回鴨川運河会議
  －「鴨川運河 100 の視点」冊子作成に向けての検討

（以後、継続中）

鴨川運河会議における会議風景

現在、NPO 景観フォーラムのメンバーと行政（深草支所）、大学・高校教員、龍谷大学の学生により構成される「鴨川運河会議」は、何らかの形で鴨川運河にかかわる者の目から見た鴨川運河の「魅力」を共有し、整理することで、地域住民が鴨川運河の魅力を活かした景観まちづくりを行っていくために参考となる冊子づくりに取りかかっている（上記の経過表を参照）。冊子づくり

においては、「鴨川運河 100 の視点」と称して、鴨川運河の魅力を伝える多様な視点を集めている。

これまで、「地域による鴨川運河の使いこなし方（人と水のかかわり）」や「写真でみる鴨川運河の今昔」といった視点が出されるなど、活発な議論のもとで継続して冊子づくりに取りかかっている。

フィールドワークの様子

３．疏水でつながる人とまち

疏水を活かしたまちづくりのプラットフォームを担うべく設けられた「鴨川運河会議」はまだその試みがようやく始動したばかりである。地域に根ざしたまちづくりは、地域住民と行政、専門家、そして地域で学ぶ学生の協働を踏まえて、はじめてその機運と意識が形成されていく。今年度のプロジェクトをもとに今後は地域住民も巻き込んだ形での景観まちづくりの取り組みへと「鴨川運河会議」の活動を展開させていく。

山紫水明の都として形づくられてきた京都の歴史のなかでも、近代京都の姿（景観！）を現代に映しつづける「鴨川運河」を基点として、人と人がつながり、人とまちがつながる、そんなまちづくりの試みがこの深草地域で実践されている。（西脇秀一郎）

（付）高松橋解体からのプロジェクトの展開

鴨川運河にかかる橋の一つ、『高松橋』が 2014 年 1 月に解体された。大正 11 年 11 月に架橋された鉄骨鉄筋コンクリート造のその橋は、90 年以上に亘り地域の交通を支えてきた。解体当日には、近隣住民の方が高松橋にまつわる思い出を懐かしく語られる姿も見られた。

鴨川運河に架かる橋は、個々には文化財と言えるレベルではないが、地域のくらしを支えてきたそれらは、一時代を語る『群』としてその存在価値を保持している。しかしながら、これらは市民がその価値を顧みる機会が無いままに解体されてしまう例が多い。今回は、

①地域の生活文化を支えてきたという価値と、その継承の重要性に市の担当者が積極的であったこと

②専門家の集まりである京都景観フォーラムが鴨川運河に着目しており、深草支所とのパイプがあったこと

これらが重なり、建設的な話し合いの下、部分的にではあるが、次代にその記憶を継承していく機会が得られた。今後、隣接地には公園ができる予定となっている。地域の方々と共に、今回保存できた要素を高松橋の記憶としてその場に引き継いで行きたいと考えている。

【実施した価値継承作業】

- 全体像を図面化する実測調査（近畿測量専門学校の協力）
- 特徴的要素である親柱、高欄、桁受梁先端の意匠、円柱の切り取り保存。
- 桁受梁先端意匠の拓本化。

高松橋は非常にラッキーなケースであったが、これをラッキーで終わらせている限り豊かな景観を守り育てていくことはできない。今後も引き続き、当たり前にあるものの価値を専門性を持って明らかにし、公と私をつなぐ NPO の役割が発揮できる環境づくりに努めたい。

（篁正康）

解体前の高松橋

拓本取りの様子

柊野プロジェクト

～柊野学区まちづくりビジョンの策定から、その推進へ～

事業概要……本プロジェクトは、平成 24 年度より、京都景観フォーラムが柊野学区町内会連合会のまちづくりに、専門家として支援しているものである。ここでは、地域の現状把握から今後 10 年間の地域まちづくりの取り組み目標までを記した『ふるさと柊野－柊野学区まちづくりビジョン』の策定過程、および、その推進状況を紹介する。

柊野学区

柊野学区は、賀茂川を挟む市街地北端に位置する歴史と自然に恵まれた地域である。1970 年代から宅地化が進み、約 12,000 人の人口を抱えている。現在も人口が増え続けており、子育て中の若い世代が多い点が特徴の一つとなっている。一方、農業も加茂ブランドとしてその地位を確立し、中心産業の一つであり続けている。また、大学や研究機関が多く、地域との連携が期待されている。

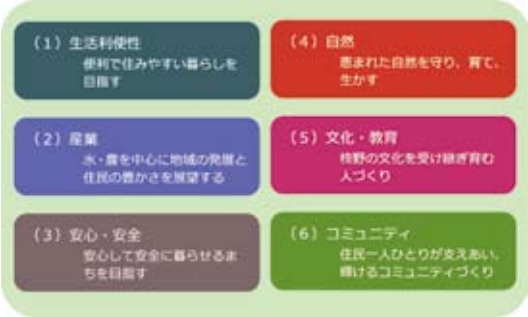
柊野町内会連合会・柊野社会福祉協議会がほぼ一体となり、まちづくり活動も活発に行われている。しかしながら、コミュニティへの参画率、自然災害への対応、インフラの整備など、地域課題も少なくなく、学区民アンケートからは、まちの将来の在り方への期待が窺われていた。

『ふるさと柊野』－柊野学区まちづくりビジョン－

平成 24 年度には、地域からの相談を機に、地域側本部役員、北区役所、支援専門機関として京都産業大学、京都市景観まちづくりセンター、そして京都景観フォーラムで､「まちづくりビジョン検討委員会」を立ち上げた。まちづくりビジョンは、柊野の現状の課題を整理した上で、今後 10 年を目標期間とする地域まちづくり活動の具体的な構想をまとめたものである。

検討委員会では、地域メンバーの“柊野”への強い愛着から、積極的で真剣な、そして夢のある意見が交わされた。それらは「希望と活力にあふれるコミュニティづくり」というスローガンのもと、下図のように６つの取り組みのテーマに分けられ、20 頁に及ぶ本編と A3 二つ折りの概要版とにまとめられた。（学区 HP にて概要版を公開）

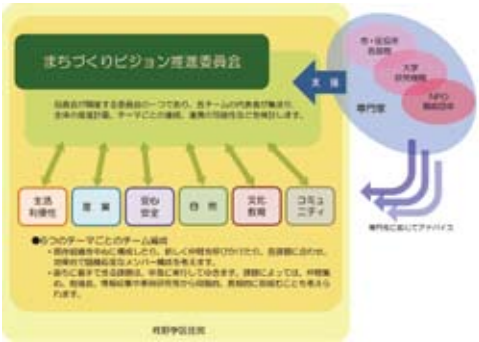
取り組みの６つの基本テーマ



推進体制と今後に向けて

ビジョンでは、６つのテーマごとの課題に取り組む「チーム」と、各チームの連携を図り、全体の推進状況を検討する「まちづくりビジョン推進委員会」の二重の推進体制をとっている。今年度は、取り組み課題の優先順位の整理とともに、チームに参画する人材を学区民から幅広く募ることが求められている。それには個々に備える能力を発見する機会づくりと、それを発揮できる場づくりが必要となってくる。景観フォーラムも引き続き支援を続け、いずれビジョンに基づくまちづくりが、柊野らしい豊かな景観として表出してくることを期待している。

（篁正康）



推進体制

公共サインプロジェクト

～放置自転車撤去警告看板の提案～

わたしたちが「京都市未来まちづくり 100 人委員会」のなかのプロジェクトチームとして活動していた時、実践的プロジェクトとしていち早く取り組んだのが公共サインの放置自転車撤去警告看板の京都型デザインの提案である。

これについては、2010 年に学生によるデザイン案を採択して制作され、2013 年度には市内ほぼ全域の約 1,100 枚が順次更新され、市内の景観向上に構成要素レベルで大きく寄与したものと推認する。

しかし、市中の違法駐輪は後を絶たず、新たな対策についての取り組みの必要性と要望が、特に中心市街地部の自治会組織の方々を中心とした「都心部の放置自転車をなくする会」から市の自転車政策課の方へ出され、子供たちの絵を暫定的にその警告看板に貼ることによって啓蒙効果をより高めたいとの決定がなされた。

これに対し、本体をデザイン・コーディネイトした立場よりサジェッションのためのテーブルを市に申し入れ、子供の絵を貼るにしても、どのようにその絵を扱うのか、全体の色やバランスなどはどうか、文字要素はどうするのかなどを、協議した。具体的には、枠や文字などのデザイン要素についてのアドバイス等を行った。その結果、見る人にどぎつくあまり良い印象を与えない「駐輪はダメ」的な禁止ワードではなく、やわらかい印象の「みんなこのまちが好き」というワードを提案し、枠の色は落ち着いたブラウン系、文字も柔らかな印象のゴシック系のフォントを提案して、親しみやすさとスタイリッシュさの高いバランスを目指した。

作品が掲示された看板は地元としても愛着の持てるものになったと推認するが、こういったプロセスで行政と住民組織、自治体、市民型 NPO との共同作業、合意形成の流れを作っていくことが、新しい成熟した市民社会の幕開けを予感させる。市のご担当や会の方々にはこういった機会を設定し細かい対応をされたことに、改めて感謝を申し上げたい。

今後については、公共サインのさまざまなあり方を検証提案する活動を続け、京都の景観向上に資するものとしていきたい。

（富家大器）

←ピンクベース系
ピンクをベースにブルーやレッドなどが入る
シンボルマークのグリーンとは不調和

→スカイブルーベースにポイントでグリーン系
シンボルマークのグリーンとポイントのグリーンが響き合う
スカイブルーの清潔感、透明感、爽快感があり、全体が軽やか

←バラバラであいまいな色使い系
赤、青、白が等分に混在し、まとまりがない
シンボルマークのグリーンも加わると盤面全体がバラバラな感じになる

→ライトグリーンベース系
シンボルマークのグリーンとのマッチングが良く、全体的に落ちついた感じになる

←薄茶～こげ茶ベース系
ベースのこげ茶とのマッチングが良く、渋い仕上がりになる

→白ベース系
文字が主体になっているケースが多い
未完成な感じ、落書きのような感じ

（中村伸之）

京都景観エリアマネジメント講座

市民が主体となって景観まちづくりを推進していくために、ここまでに報告したような地域でのきっかけづくりから活動支援することに加え、それらの地域をサポートする専門家の育成とネットワークづくりを、京都景観フォーラムの活動のもう一つの柱としている。

市民主体の「景観まちづくり」を進めるには、地域によってさまざまな背景、歴史や文化、経済や人々の暮らし方など、地域固有の情報を読み取り、住民が共有する価値観として結実させていくことが必要である。それには、多様な分野の専門家が連携し、景観に関する幅広い知見をもって手助けすることが必要だと考える。さらに平成 23 年 4 月に、地域で景観づくりに取り組む仕組みとして京都市が創設した「地域景観づくり協議会」を立ち上げて活用していくためにも、市民とともに景観づくりを推進していく専門家が求められている。

本講座では、こういったスキルを身に付けるために、基礎的な知識やノウハウから歴史や法律に関すること、文化的・精神的なことまでを含め、「京都の景観」を考えることに重点を置いたカリキュラムを組み立てている。１年目は講義による基礎講座、２年目はより能動的な内容の実践講座で、２年間の講座を修了したものを、「京都景観エリアマネージャー」として登録し、活動を共にし、地域へ派遣などの機会も与えられる。

この講座は平成 22 年より実施しているが、次第に京都だけでなく近畿や東京など遠方からの受講者も増えている。今年までの受講者は約 120 人（単回だけの聴講を除く）、「京都景観エリアマネージャー」は約 40 人（今年度の修了見込みを含む）となった。

今後もさらに景観を学び、地域の「景観まちづくり」を支援する専門家が増えることを期待している。

（内藤郁子）

平成 25 年度カリキュラム

□第 4 期 基礎講座（通年受講者 29 名）

	テーマ	講師
第１回	基礎理論	堀繁氏：東京大学大学院教授
第２回	海外事例と伝統文化	宗田好史氏：京都府立大学教授、　笹岡隆甫氏：華道家・未生流笹岡家元
第３回	京都のまちの形成と景観史	高橋康夫氏：花園大学教授、　中川理氏：京都工芸繊維大学大学院教授
第４回	土木と景観デザイン	山田圭二郎氏：京都大学大学院特定准教授、　篠原修氏：東京大学名誉教授
第５回	京の生活文化	矢ヶ崎善太郎氏：京都工芸繊維大学大学院教授、　谷晃氏：野村美術館館長
第６回	建築とランドスケープ	江川直樹氏：関西大学教授、　佐々木葉二氏：京都造形芸術大学教授
第７回	景観政策と法律	飯田昭氏：弁護士、　石田光曠氏：司法書士
第８回	景観まちづくり・修了式	髙田光雄氏：京都大学大学院教授

□第 3 期 実践講座（受講者 14 名）

	テーマ	講師
第１回	景観	堀繁氏：東京大学大学院教授
第２回	色彩	渡辺安人氏：アーキタイプ工房代表
第３回	ファシリテーション	中田豊一氏：ソムニード代表
第４回	修徳学区のまちづくり	門内輝行氏：京都大学大学院教授
第５回	ワークショップ	京都景観フォーラム
第６回	修了式	レポート発表会・修了式

キーワード集プロジェクト

本プロジェクトは、「京都 × 景観」を考える上でポイントになるキーワードを平易に解りやすく解説し、景観への関心を高め、身近なものとして理解し、視点を広げてほしいとの思いから発足しました。ゆくゆくはその成果をまとめ、一般向けに出版したいと計画しています。

キーワードは、例えば

「LED イルミネーション」「校舎」「商店街のアーケード」「銅像（高山彦九郎など）」「乙女ちっくハウス」「大型観光バス」「岡崎公園」「SF 建築」「近代建築」「北山通」「お地蔵さん」「祇園町北側」「京都タワー」「オープンカフェ」「京の三悪（平安神宮大鳥居・祇園閣・霊山観音）」などなど・・・・まだまだたくさんありますね。

一緒に考えてみませんか？　　（辻野隆雄・富家大器）

屋外広告研究プロジェクト

事業概要 // 本プロジェクトは、当 NPO と都市環境デザイン会議（JUDI）、NPO 法人ストリートデザイン研究機構（東京）の共同研究で「都市ブランドを創造する屋外広告物の研究〜京都の歴史的市街地を対象として」というテーマで実施している。

先進的な景観行政で注目を集める京都市の歴史的市街地を調査対象地区とし、都市ブランドの創造に貢献し、都市の活力を呼び起こすような屋外広告物・店構えのあり方を研究し提案するものである。なお、このプロジェクトは JUDI 本部および関西ブロックの助成を受けて実施している。（2012,13 年度）

2007 年の新景観政策施行以来、町並みにそぐわない看板が減少し、京都市の屋外広告物政策は目に見える成果を着々と上げていると思われる。今後、求められるのは、地域住民・事業者とともに細かなエリアごとの都市ブランドを探り、ブランド力を高めるような望ましい屋外広告物や店舗のデザインを具体的に提示し検証する作業である。

2012 年度は三条通、姉小路通、木屋町通、先斗町通を対象地区としてフィールドワークを行うとともに、絵画史料から京の町並みの看板風景を分析した。

図 1 は江戸時代の『三条油小路町西側･東側町並絵巻』（1820）の町並みと看板をパターン化したもの。図 2 は明治時代のガイドブック『都の魁（さきがけ）』（1883）の店舗と看板をパターン化したもの。図 3 は現代（2013）の姉小路通の町家店舗を集めてパターン化したものである。

この作業により、広告表現の時代変遷を分析することができた。また、業種や地域によって看板・店構えが違い、それが都市ブランドであること、そのブランドは時代を超えて受け継がれていることが分かった。

この成果を受けて、2013 年度は各通りの屋外広告ガイドライン試案を作成する。　　（中村伸之）

図 1　江戸の町並み（三条油小路西）

図 3　現代の町並み (姉小路通の町家店舗を集めた場合)

図 2　明治の町並み（三条通）

KYOTO KEIKAN FORUM

このシンポジウムは京都市未来まちづくり 100 人委員会からの活動支援金を受けて実施いたします。

発行日 /H26.3.1